

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: きづき--自分に眠る可能性--

年 組 番

星の花が降るころに 安東 みきえ

氏名



星の花が降るころに

安東 みきえ

銀木犀の花は甘い香りで、白く小さな星の形をしている。そして雪が降るように音もなく落ちてくる。去年の秋、夏実と二人で木の真下に立ち、花が散るのを長いこと見上げていた。気がつく、地面が白い星形でいっぱいになっていった。これじゃふめない、これじゃもう動けない、と夏実は幹に体を寄せ、二人で木に閉じ込められた、そう言って笑った。

——ガタン！

びつくりした。去年のことをぼんやり思い出していたら、机にいきなり戸部君がぶつかってきた。戸部君は振り返ると、後ろの男子に向かってどなった。

「やめろよ。押すなよなあ。俺がわざとぶつかつたみたいだろ。」

自習時間が終わり、昼休みに入った教室はがやがやしていた。

私は戸部君をにらんだ。

「なんか用？」

「宿題をきこうと思って来たんだよ。そしたらあいづらがいきなり押してきた。」

戸部君はサッカー部のだれかといつもぶざけてじゃれ合っている。そしてちよつとしたこづき合いが高い。すぐに本気のけんかになる。わけがわからない。塾のプリントを、戸部君は私の前に差し出した。

「この問題わかんねえんだよ。『あたかも』という言葉を使って文章を作りなさい、だって。おまえ得意だろ、こつこついうの。」

私だってわからない。いっしょだった小学生のころからわからないまま。なんで戸部君はいつも私にからんでくるのか。なんで同じ塾に入ってくるのか。なんでサッカー部なのに先輩のように格好よくないのか。

「わかんないよ。そんなの自分で考えなよ。」

隣の教室の授業も終わったらしく、椅子を引く音がガタガタと聞こえてきた。私は戸部君を押しつけるようにして立ち上がると廊下に向かった。

戸部君に関わり合っている暇はない。今日こそは仲直りをすると決めてきたのだ。はられたポスターや掲示を眺めるふりをしながら、廊下で夏実が出てくるのを待った。

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。だから春の間はクラスが違っても必ずいっしょに帰っていた。それなのに、何度が小さな擦れ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。おたがいに意地を張っていたのかもしれない。

お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそつとなでた。中には銀木犀の花が入っている。もう香りはなくなっているけれどかまわない。去年の秋、この花で何か手作りに挑戦しようと言ってそのままになっていた。香水はもう無理でも試しにせっけんを作ってみよう、そして秋になったら新しい花を拾って、それでポプリなんかも作ってみよう……

そう誘ってみるつもりだった。夏実だって、私から言いだすのをきくと待っているはずだ。夏実の姿が目に入った。教室を出てこちらに向かってくる。

そのとたん、私は自分の心臓がどこにあるのかがはつきりわかった。ときどき鳴る胸をなだめるように一つ息を吸ってはくと、ぎこちなく足を踏み出した。

「あの、夏実——」

私が声をかけたのと、隣のクラスの子が夏実に話しかけたのが同時だった。夏実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながら私からすつと顔を背けた。そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

騒々しさがやつと耳に戻ったとき、教室の中の戸部

君がこちらを見ていることに気づいた。私はきつとひどい顔をしている。唇がふるえているし、目のふちが熱い。きまりが悪くてはじかれたようにその場を離れると、窓に駆け寄って下をのぞいた。裏門にも、コンクリートの通路にも人の姿はない。どこも強い日差しをせいで、色が飛んでしまったみたい。貧血を起こしたときに見える白々とした光景によく似ている。

私は外にいる友達を探しているふうには熱心に下を眺めた。本当は友達なんていないのに。夏実の他には友達とよびたい人なんてだれもないのに。

帰りは図書委員の集まりがあったせいで遅くなった。のろのろと靴を履きかえていると、校庭からサッカー部のかけ声が聞こえてきた。

もう九月というのに、昨日も真夏日だった。校庭に出ると、毛穴という毛穴から魂がぬるぬると溶け出してしまいうる暑かった。

運動部のみんなはサバンの動物みたく、入れかわり立ちかわり水を飲みにやってくる。水飲み場の近くに座って戸部君を探した。夏実ののこを見られたのが気がかりだった。繊細さのかけらもない戸部君だから、みんなの前で何を言いだすか知れたものじゃない。どこまでわかっているのか探っておきたかった。だいたいなんであんな場面をのんびりと眺めていたのだろうか。それを考えると弱みをにぎられた気分になり、八つ当たりとわかつても憎らしくてしかたがなかった。

戸部君の姿がやつと見つかった。

なかなか探せないはずだ。サッカーの練習をしているみんなとは離れた所で、一人ボールを磨いていた。サッカーボールはぬい目が弱い。そこからほころびる。だから砂を落としてやらないとだめなんだ。使いたいときだけ使って、手入れをしないのはだめなんだ。いつか戸部君がそう言っていたのを思い

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: きづき--自分に眠る可能性--

年 組 番

星の花が降るころに 安東 みきえ

氏名



出した。

日陰もない校庭の隅っこで背中を丸め、黙々とボール磨きをしている戸部君を見ていたら、なんだか急に自分の考えていたことがひどく小さく、くだらないことに思えてきた。

立ち上がった水道の蛇口をひねった。水をばしゅばしゅと顔にかけた。冷たかった。溶け出していた魂がもう一度引つ込み、やっと顔の輪郭が戻ってきたような気がした。

てのひらに水を受けて何度もほおをたたいていると、足音が近づいてきた。後ろから「おい。」と声をかけられた。戸部君だ。ずっと耳になじんでいた声だからすぐわかる。

顔を拭きながら振り返ると、戸部君が言った。

「俺、考えたんだ。」

ハンドタオルから目だけを出して戸部君を見つめた。何を言われるのか少し怖くて黙っていた。

「ほら、『あたかも』という言葉を使って文を作りなさいってやつ。」

「ああ、なんだ。あれのこと。」

「いいか、よく聞けよ……おまえは俺を意外とハンサムだと思ったことが——」にやりと笑った。「——あたかもじゃない。」

やっぱり戸部君って、わけがわからない。

二人で顔を見合わせてふき出した。中学生になっただけでちゃんと向き合っただけでなくなったから気づかなかったけれど、私より低かったはずの戸部君の背はいつのまにか私よりずっと高くなっている。

私はタオルを当てて笑っていた。涙がにじんできたのはあんまり笑いすぎたせいだ、たぶん。

学校からの帰り、少し回り道をして銀木犀のある公園に立ち寄った。

銀木犀は常緑樹だから一年中葉っぱがしげっている。それをきれいに丸く刈り込むので、木の下に入る

れば丸屋根の部屋のようだ。夏実と私はここが大好きで、二人だけの秘密基地と決めていた。ここにいれば大丈夫、どんなことから木が守ってくれる。そう信じていられた。

夕方になって涼しくなっても日差しはまだ強い。木の下は陰になって涼しかった。

掃除をしているおばさんが、草むしりの手を休めて話しかけてきた。

「いい木だねえ、こんな時期は木陰になってくれて。けど春先は、葉っぱが落ちて案外厄介なんだよ、掃除がさ。」

私は首をかしげた。常緑樹は一年中葉っぱがしげっているはずなのに。

「え、葉っぱは落とさないんじゃないんですか。」
「まさか。どんだん古い葉っぱを落っこして、その代わりに新しい葉っぱを生やすんだよ。そりゃそうさ。でなきゃあんた、いくら木だって生きていけないよ。」

帽子の中の顔は暗くてよくわからなかったけれど、笑った歯だけは白く見えた。おばさんは、よいしょとやって掃除道具を抱えると公園の反対側に歩いていった。

私は真下に立つて銀木犀の木を見上げた。

かたむいた陽が葉っぱの間からちらちらと差し、半円球の宙にまたたく星みたいに光っていた。

ポケットからビニール袋を取り出した。花びらは小さく縮んで、もう色がすっかりあせている。

袋の口を開けて、星形の花を土の上にばらばらと落とした。

ここでいつかまた夏実と花を拾える日が来るかもしれない。それとも違うだれかと拾うかもしれない。あるいはそんなことはもうしないかもしれない。どちらだっていい。大丈夫、きつとなんとかやっつけている。

私は銀木犀の木の下のくぐって出た。

◎ この作品は、一年生の時に学んだものかもしれませんが。もう一度、読み返して、この作品のテーマ(筆者が描こうとしたこととは何か)を捉え、自分自身の中に落としこみましよう。